

巻頭言

岡田康伸

臨床心理学部紀要が第3巻を迎え、このたび発行の運びとなったことは喜ばしいことです。京都文教大学の研究がどのようなものであるかを世に問う機会だからです。ただ、今の5コース制のシステムのもとに臨床心理学部が発足して、まだ3年なのですが、少しこの制度を変えざるを得なくなってきました。それは子どもの減少から来る受験生の減少です。さらに、経済の不況の影響で、地元志向が加わり、あまり遠方へ出かけない傾向や受験生が在学中に資格を得たいとする特徴などです。これらに対応しながら、より臨床心理学部の特徴を生かし、魅力的なものにしていこうとしているのです。臨床心理学部の強さは、高校生が思春期から青年期への移行の中におり、その時の普遍的なテーマであることに関心をもっているであろうと思えることです。すなわち、性の成熟とそれに伴う関心と動揺や「人生とは何か」や生き方への苦悩などの悩みを持っているであろうと想像できることです。これらへのアプローチとしての臨床心理学はどこか支持されるのではないかという確信があります。これらの問いへの明確な答えがすぐに見つかるわけでもないし、答えがあるわけでもないかもしれませんが、学生とともに考えていこうとする臨床家としての構えを教員一同がもっていることが強みです。このような態度や教員の研究の内容を知ってもらうの

が紀要です。高校生がこの紀要を読むとしてもわずかで、ほとんどの人が読むわけではありませんが、高校の先生や保護者のかたに、京都文教大学は興味深い先生方が居るとわかってもらうことが大切です。紀要の持つ意味はここにあります。これが3巻目になり、学部がますます発展していることが伝わることを願っています。

目次を見てもらうとわかるように、論文は8本を数え、研究ノートが2本と資料が1本と報告1本の計12本です。研究ノートをもうけているのが本学の特徴の一つに考えられます。研究ノートはこれから研究していこうとする方向を自由に述べることができ、研究者の発想と意気込みなどが示せるもので、評判がよいものです。しかし、それ以後の地道な研究が求められるので、しんどいことでもあります。紀要の執筆者は教授から院生までの、臨床心理学部の構成員全員が関わるできるようになっています。紀要の質を下げないためにも、査読制度を取っています。今までは、学内の教員が担当していますが、学外の研究者にも依頼することで、少しでも質を落とさない工夫が求められています。少しずつでも改善しながら、日本で唯一の臨床心理学部が発展し続けられればと願っています。